

## 論文

# 霜田史光研究落穂拾い（その4）

竹 長 吉 正

Supplements to the Research Work of Shiko SHIMODA (IV)

TAKENAGA Yoshimasa

キーワード：大正期・昭和初期の文芸雑誌、  
『中央文学』『文章倶楽部』『小説倶楽部』、  
森田恒友、文学史的位置、著作目録参考文献目録の補遺

### 全体の構成

- (15) 大正期・昭和初期の文壇資料と霜田史光  
——『中央文学』『文章倶楽部』——
- (16) 雑誌『小説倶楽部』と霜田史光
- (17) 田園画家森田恒友と霜田史光
- (18) 終りに——再び述べる、霜田史光の文学史的位置——
- (19) 霜田史光著作目録、霜田史光研究参考文献目録の補遺
- (20) 附記及び総目次

## (15) 大正期・昭和初期の文壇資料と霜田史光 ——『中央文学』と『文章倶楽部』——

大正期・昭和初期の文壇資料二つ、すなわち、雑誌『中央文学』『文章倶楽部』と霜田史光との関わりについて述べておく。

『中央文学』は、大正6年（一九一七）4月創刊、終刊は第5巻第12号（大正10年12月）。発行所は春陽堂。表紙は竹久夢二が描いている。新潮社が発行する『文章倶楽部』等と並んで、年の若い文学愛好者を読者対象として編集された。なお、『中央文学』は平成17年（二〇〇五）10月、雄松堂出版から全冊、複製版が刊行された。

霜田史光が『中央文学』に執筆したのは、エッセイ「本年詩壇の回顧」一篇であり、それは『中央文学』第5巻第12号（大正10年12月）、つまり、終刊号に掲載された。

以下、「本年詩壇の回顧」のエッセンスを取り上げて述べる。

このエッセイは400字詰め原稿用紙に換算すると、約二十五枚になる長文である。大正10年詩壇を回顧しての「これからの展望」を述べる評論であるが、中身は詩集を発行した新進詩人の紹介や大家の活躍などを紹介する記事が中心になっており、史光らしい切れ味の鋭さは見られない。

島崎藤村の50年祝賀会を詩話会主催で行ったこと、個人詩集や詩人団体によるアンソロジーの出版、詩誌『新詩人』『日本詩人』『詩聖』『かなりや』の発刊が、主な出来事として取り上げられている。

「民衆派 対 象徴派」の「論争」として史光が取り上げているのは、詩話会が中心になって出版した『現代詩人選集』（新潮社刊）所収詩人の人選をめぐり、象徴派と民衆派が対立した事件である。この事件は様々な日本近代詩史で取り上げている出来事である。それを当時、見ていた霜田史光がどのように受けとめていたかを探る上で、この文献は価値がある。また、史光はこの評論の中で、詩話会への反発から詩人会や新詩会が結成

されたことを述べている。これは極めて興味深いことであり、史光個人のみならず、当時の対立を目撃した者すべての証言として極めて重要な証言であると言える。以下、このことについて詳しく述べる。

史光はこの評論で、島崎藤村の生誕50年祝賀会を詩話会主催で行ったこと（＊大正10年2月、上野の精養軒で行われた）については、「（それは）詩のために大いに気を揚げたものと言わなければならない。」（＊以下、引用に際し、原文は新漢字及び現代仮名遣いの、「現代表記」に改めた）と評価している。

次に、詩話会が中心になって出版した『現代詩人選集』については、次のように述べている。

これはちっとも現代でない。過去の人も数人入っている。また、現代に相当認められている人が、だいぶ、もれている。小説家の方で『現代小説選集』を作った時は、みんなで人選を、幾度も投票し合って決めたという。しかし、『現代詩人選集』の場合、人選を詩話会の委員連中ばかりで勝手にきめてしまったという。これでは確かに専横だと言われることはまぬがれない。会員全員にはかるべきではなかったか。こうしたことは殊に若い詩人たちに反感を買って、（中略）青年詩人たちで新たに詩人会が組織され、雑誌『新詩人』が発刊された。（＊傍点、原文）

詩人会を組織し、雑誌『新詩人』を発刊する上で中心的に活躍したのは、井上康文である。

史光は詩話会の分裂に関して、青年詩人たちの詩人会の他に、新詩会という団体のことにもふれている。史光はこの評論で明言を避けているが、新詩会を結成したメンバーが北原白秋、日夏耿之介、西條八十、竹友藻風らであることから彼らを、いわゆる「象徴派」ととらえていたことは確かである。この時、史光の立ち位置は、まことに微妙であった。

史光は言うまでもなく、三木露風の門から出発した詩人であるから、「象

徴派」に対して好意的である。しかも、西條八十とは同人誌『詩王』を介しての仲間同志であった。しかし、史光はしだいに三木露風と疎遠になり、西條八十とも距離を置くようになる。史光の詩風を大きく変化させたのが何であるか、わたくしはいまだに解明できていないが、史光はいつの間にか民衆派の白鳥省吾などとも親しくなり、「民衆の詩」としての「新民謡」の運動に邁進していく。そのような詩人としての軌跡の中で、大正10年の霜田史光の位置を示すものが、この評論「本年詩壇の回顧」である。

この評論で、「象徴派」(\* 史光は象徴派と呼んでいるが、人によっては芸術派と呼ぶ。後掲の史光の文を読むと生活派に対抗するものとして芸術派と呼ぶのがふさわしいとも思える)に属す詩人として取り上げられているのは、三木露風、北原白秋、日夏耿之介、西條八十の四人である。これらの詩人はおおむね、肯定的ないし好意的に取り上げられているのだが、日夏耿之介に対してだけは否定的である。史光は日夏の詩について、次のように述べている。

私の考えで言うと、日夏耿之介氏に多少の疑問がある。元来私は氏の擬古的な、そして漢語を盛んに用いて、固い言葉<sup>かた</sup>の羅列には興味がない。氏の表現法が如何に彫琢を極め、厳粛味を出していることは知っている。それをある点までは認める。けれども私は、詩はもっと単純に、誰もがわかるような言葉をもって、誰もが心に通ずべき感情を最上に表現するをよしとする者である。氏の詩を見れば、うまいと思う。しかし私は、それに感動したことは少ない。多分、詩の素人には理解が困難であろうと思われる。こう言うと氏は、「愚俗に受け入れられようとしているのではない。自分は芸術の深奥に向かって進んでいるのだ。」と言うかもしれないが、畢竟<sup>ひっきょう</sup>するに、芸術は人生のための芸術である。芸術のための芸術ではない。民衆を度外視した詩歌は、結果、骨董品に過ぎない。私は芸術を我々の生活上に持ってきて、三度の食事と等しいくらいな尊さをもたせたいのである。この言葉が日夏氏の詩に全部あては

まるものだとは思わぬが、多少はこうした意味を認めるのである。

この批判は当時、難解でペダンチックな（衛学的な）詩人として知られた日夏耿之介への批判と言うよりも、むしろ、史光自身の詩観の吐露といった方が当たっている。つまり、霜田史光自身の真情告白である。

すなわち、霜田史光はいっぽうで、三木露風、北原白秋、日夏耿之介、西條八十らに共通する「詩の象徴的手法」に共鳴しながらも、また、いっぽうでは、象徴派詩人の「極北」とされる日夏耿之介の「行き過ぎた象徴詩」に強く反発している。

そして、このような詩観の持ち主である霜田史光の詩人としての行き着くところは、「生活派」「人生派」であった。

当時どちらかと言えば、「生活派」「人生派」の詩人であった民衆派の白鳥省吾や、福田正夫、井上康文らに近い位置取りをするようになる史光であった。

わたくしはこの原稿で先に、「史光の詩風を大きく変化させたのが何であるか、わたくしはいまだに解明できていない」と書いたが、おそらく、それは当時の民衆文学勃興期、欧米の民衆文学が多く紹介され、吉野作造の「民本主義」が広がった、そのような時代の空気に影響を受けたということであろうと、推察する。

なお、この評論で、もう一つ述べておきたいのは年代的（時期的な）考証である。

島崎藤村の生誕50年祝賀会を詩話会主催で行ったのは大正10年（一九二一）2月であり、それは上野の精養軒で行われた。

続いて、同年3月、北原白秋らが詩話会を脱会し、新詩会を結成した。

そして、同年5月、井上康文らが詩話会を脱会し、詩人会を結成し『新詩人』を発刊した。

新詩会は新しい雑誌を出すこともなく、間もなく解散した。

しかし、『新詩人』は大正13年10月まで続く。全22冊を出して廃刊となる。

史光がこの評論「本年詩壇の回顧」で問題にしている「民衆派 対象派」の「論争」は詩史的には、この後、すなわち、大正11年9月、北原白秋が雑誌『詩と音楽』創刊号にエッセイ「芸術の円光——主として詩について——」を発表してから過激になる。そのエッセイで白秋は、「散文系自由詩」が「詩の動律」「詩の風韻」「詩の品位」をないがしろにし、詩は散文と同じものになったと批判した。白秋は「いわゆる人道派民衆派」を「素材派」と呼び、彼らの詩の隆盛を「人道派民衆派の横暴時代」と非難した。個人的には、白秋は白鳥省吾や福田正夫の詩を取り上げて批判した。これにはもちろん反論があり、白秋と民衆派詩人との間で激しい論争が繰り広げられた。

このような論争を取り上げた菊地康雄の『青い階段をのぼる詩人たち——現代詩の胎動期——』（青銅社 昭和40年）で菊地は、白秋は「大上段にふりかざしたきらいはあるが」と断りながらも、公平に見れば白秋の論の方が正鵠を得ていたと述べている。

ところで、この時点で（つまり、大正10年の時点で）、霜田史光はこの論争をどのように見ていたのかが、気になるところである。以下、「本年詩壇の回顧」（『中央文学』大正10年12月）から引用する。

（\*引用者補記、民衆派と象徴派は）お互いにいくらかずつ理解し合って、相近づこうとしている傾向の見えることがある。これが本当の行き方であると思われる。絶対に象徴の精神を離れて詩は存在し得られぬと言ってもいいくらいで、象徴の精神はすなわち、詩の精神なのである。ただ、在来の象徴詩のとった態度が是か非かという問題だけである。

詩はもちろん、贅沢品でもなければ骨董品でもないのだから、庶民的であるべきことはもちろんである。しかし、詩本来の優雅と清澄とを忘れてはならぬのである。詩をもって何かのプロパガンダをするのもいいけれども、それが詩の本来であると言うことは、もちろんいけない。

その結果がプロパガンダに用いられようと、思想の表現に用いられようと、それはかまわない。けれども、その出発点においては、あくまでも感動を主としなければならない。この感動を主とすることが詩の尊いところで、それが如何なるスタイルに現れるにしても、読者に与えるものは最初に感じた感動なのである。ところが、近頃はこの感動すらしに、いな、感動抜きにして「作られる」詩の多いことは、まことにあきれざるを得ない。ほとんど有るか無きかくらいの感動を誇張するのは、まだ、いいほうである。はなはだしいのに至っては、感動の無いことを売り物にして、そのがさつさを得々としたる作者のいることである。それは真正な詩のために悪毒を流すものである。

（＊圏点は原文）

ここに述べられていることは、民衆派と象徴派の論争対立という観点からは、やや横にそれているが、それでも注意深く読めば、所々に、史光の詩観、すなわち、民衆派と象徴派に対する立場（姿勢）をうかがうことができる。

つまり、史光の立場は、象徴派の象徴という方法を忘れずに詩作しつつ、しかも、かつての象徴派詩人の陥った欠点（難解すぎる詩を作り、庶民の生活や感動を忘失してしまったこと）を補おうとするものであった。

このような立場から霜田史光は、自らの詩人としての出発点であった象徴派の初心を忘れずに、しかも、旧来の象徴派にとどまらず、自ら民衆派にも近づいた。史光が一時（すなわち、この大正10年の頃）、井上康文らの詩人会に参加したのは、このような事情からである。

次に、史光が関係したもう一つの雑誌『文章倶楽部』を見てみよう。

『文章倶楽部』は既に述べたように、新潮社が発行した文芸雑誌で、年の若い文学愛好者を読者対象として編集された。大正5年（一九一六）5月に創刊、終刊は昭和4年（一九二九）4月。『中央文学』と同様、菊判

竹 長 吉 正

サイズである。これは誌名が「文学倶楽部」でなく「文章倶楽部」であることから察せられるように、「文章初学者のための」「文章上達への手引」という性格があった。しかし、当然のことながら、当時、文章上達の道は「文学に親しむ外にない」という考えが根強く、雑誌はしぜん、文学中心に傾いていった。

なお、平成7年（一九九五）3月、八木書店からマイクロ版（CD-ROM版を含む）が刊行された。こうして『文章倶楽部』全155冊を容易に見ることができるようになった。

『文章倶楽部』に霜田史光が執筆しているのは、次の6本である。

- 〈1〉 詩「吹雪の夜」第6年第5号（大正10年5月）
- 〈2〉 詩論「新らしい民謡に就いて」第6年第9号（大正10年9月）
- 〈3〉 詩人論「新らしい民謡作家 野口雨情氏、北原白秋氏、藤森秀夫氏」第6年第10号（大正10年10月）
- 〈4〉 詩「雑音の中に」「朝の光」第7年第1号（大正11年1月）
- 〈5〉 アンケート回答「（私の詩を作る用意2） 七箇条」第7年第8号（大正11年8月）
- 〈6〉 随筆「（東京に於ける文士の分布1） 文壇本郷党の事ども」第10年第2号（大正14年2月）

ここではまず、〈6〉随筆「（東京に於ける文士の分布1） 文壇本郷党の事ども」（\*以下、「文壇本郷党の事ども」と略記）を取り上げて述べる。

何も文壇に本郷党なんて団体がある訳でないが、本郷に住む文士諸君を仮に本郷党と呼んだに過ぎない。

冒頭、史光がこのように述べているように、文壇本郷党とは史光の勝手な名づけである。



この文章で取り上げられている文士、及びグループは、葛西善藏、三上  
於菟吉<sup>おときち</sup>、久米正雄、広津和郎、囲碁仲間（豊島与志雄<sup>じゅういちや</sup>、十一谷義三郎、西  
川勉、田中総一郎、川端康成）。他に、評論の伊福部隆輝<sup>たかてる</sup>、画家の多ヶ谷  
信乃<sup>のぶゆき</sup>、白山の南天堂書店に集まるダダイズム詩人らの一群である。

特に史光が多く筆を割いているのが、囲碁仲間のことである。

三年ばかり前、私が『小説倶楽部』を編輯していた時分、西川君  
と私とが発起人になって文壇碁会なるものの第一回を、赤坂の山王境内  
に開いた。「同好御誘いの上」という文句を入れた通知状を五枚ほど出  
したら、十人ばかり来てしまった。文壇的な、どんな会合だって、こん  
なうまい具合にはいくまい。その時集まったのは、山本有三、豊島与志雄、  
佐治祐吉、岡落葉、石丸梧平、三宅幾三郎、なお二人ばかりと西川君と  
私とを加えたものだった。その時分、私は今の田中君や川端君くらいの  
弱さであって、軒並みに四目ずつ置いていた。佐治祐吉君は中では一番  
強くて、初段に五六目の腕前だったから、諸君も四目くらい置いていた。

第二回は間もなく、根津の娛樂園で、もっと盛大に開かれたが、  
自分は都合悪くして出席できなかった。

文壇碁会は、それ切りで打ち絶えていたような状態であったが、  
昨年の十月にまた、話が出て、根津の娛樂園で、その第三回を開いた。  
第一回の頃と比べると十一谷君と私とは、連中と互角になるほど出世し  
ていた。十一谷君は、その道を勉強したのでろうし、私はいまいいし  
から、こっそり、四段の先生の所へ習いに通った。

この文には、「三年ばかり前、私が『小説倶楽部』を編輯していた時分」  
という興味深いことが記されている。『小説倶楽部』という雑誌につい  
ては、この後の章で詳しく述べるが、それはともかく、この文壇碁会の第  
一回を開いたのが、史光と西川勉だとされている。そして、その文壇碁会が  
「昨年の十月」（大正十三年十月）に第三回を行ったという。その成績は次

竹 長 吉 正

のとおりである。

佐治祐吉	7勝5敗（勝率5割8分）	豊島与志雄	9勝 9敗1引分け（5割）
十一谷義三郎	13勝9敗（5割9分）	西川勉	11勝13敗（4割6分）
佐々木味津三	8勝7敗（5割3分）	霜田史光	7勝11敗（3割9分）
多ヶ谷信乃	10勝9敗（5割3分）	田中総一郎	1勝 8敗（1割1分）
川端康成	6勝6敗（5割）	山崎麓	7勝 1敗（8割8分）

この成績を見ると、十一谷は勝率5割であるが、史光は3割9分である。「私はいまいましたから、こっそり、四段の先生の所へ習いに通った。」と書くのも、うなずける。

このエッセイ「文壇本郷党の事ども」で、白山の南天堂書店に集まるダダイズム詩人らの一群について述べているところがある。以下、引用する。

彼らはその雑誌の表明するとおり、勇敢であり、また、無邪気でもある。

南天堂の二階は、若い、血の気のある文学者や文学青年が、いつも集まっている。すこぶる、にぎやかだ。あまりに乱雑で、<sup>たいはいてき</sup>頹廢的気分が流れているので好まぬという人もあるが、私はそれほどまでは思わない。だが、時々行って、元気のある一派に氣押されて憂鬱<sup>ゆううつ</sup>になって帰って来ることがあるのは事実だ。

いずこもそうであろうが、本郷の若い文士仲間の間では始終、婦人の問題で、ごたつきがある。カフェでビール壺の飛ぶことが珍しくないし、殺すの死ぬのという殺伐<sup>さつぱつ</sup>な言葉がおうおう、聞こえてくる。

雑誌『赤と黒』（大正12年1月創刊）の廃刊（大正13年6月）後、その同人たちが中心になって『DAMDAM（ダムダム）』が大正13年11月、創刊された。『ダムダム』には、萩原恭次郎、橋爪健、飯田徳太郎、中野秀人、

野村吉哉、林政雄、岡本潤、小野十三郎、高橋新吉、壺井繁治らが集まった。

大正12年（一九二三）9月には、関東大震災があった。大杉栄らが殺害され、また、大震災後、左翼への取り締りや弾圧が強化された。

そして、大正13年（一九二四）10月には、横光利一、川端康成、佐々木味津三、十一谷義三郎らが『文芸時代』を創刊した。

史光は、このような時代の中にいたが、『赤と黒』や『ダムダム』の詩人らとは深くつき合うことがなかった。むしろ、川端、佐々木、十一谷らという新感覚派の作家たちと、碁会を通して交際していたのである。

そして、史光は時折、ダダイストやアナーキスト詩人の集まる南天堂に出かけたようである。しかし、既に見たように深入りはせず、彼らの様子を静かに眺めているというふうであった。

寺島<sup>たまお</sup>珠雄の書いた『南天堂 松岡虎王<sup>とらおうまろ</sup>麿の大正・昭和』（皓星社 1999年9月）という本には、南天堂の主人（経営者）松岡虎王麿の生涯と、南天堂（本郷の白山上にあった書店・カフェ・レストラン。その一階は書店で、二階がカフェ・レストラン）に集まった詩人・作家・画家など芸術家の群像が精細に描かれている。わたくしはこの本を興味深く読んだが、霜田史光の名を見つけることはできなかった。寺島はこの本で、多くの資料を駆使して、ダダイストやアナーキスト詩人・作家の風貌と、経営者松岡虎王麿の生涯を丹念に描いている。特に詩人では岡本潤、小野十三郎、作家では林芙美子、友谷静栄（＊林芙美子の友人で、詩が中心）、平林たい子らが詳しく描かれている。

霜田史光は前掲の文で、「（彼らは）あまりに乱雑で、頹<sup>たいはいてき</sup>廢的気分が流れているので好まぬという人もあるが、私はそれほどまでは思わない。」と、ダダイストやアナーキスト詩人・作家を毛嫌いするのではないが、本当のところは「よくわからないが、少し魅かれる」という程度のものだったのであろう。

また、「婦人の問題で、ごたつきがある」というのは、女性の奪い合いや、自由恋愛のような雰囲気<sup>きふき</sup>が南天堂には漂っていたということである。倫理

竹 長 吉 正

的にも潔癖さを崩さなかった史光としては、そのような面からも、到底ついていけないと感じていたのであろう。

ともあれ、このエッセイ「文壇本郷党の事ども」は、大正12年、13年ころの本郷の作家・詩人の姿、生活ぶり（遊びを含む）を描写していて、一個の文壇資料として大いに価値を有する。

## (16) 雑誌『小説倶楽部』と霜田史光

雑誌『小説倶楽部』のことについては、エッセイ「文壇本郷党の事ども」で、「三年ばかり前、私が『小説倶楽部』を編輯していた時分」とあり、この雑誌に霜田史光が深いかかわりをもっていたことが明らかである。

この『小説倶楽部』という雑誌はかつて、わたくしが国会図書館で史光の資料を探している時、何冊かを見たことがあるが、その全貌をつかむことができなかった。その後、知人の曾根博義氏を通して、この『小説倶楽部』についての情報を得ることができたので、それを基にして、以下、述べることにする。

大正9年ころ、演芸講談社発行の『演芸講談界』という雑誌があった。『演芸講談界』は、『講談倶楽部』（講談社）『講談雑誌』（博文館）などの大雑誌の向こうを張って出された小出版社（＊演芸講談社はのち、社名を民衆文芸社に変更）の演芸講談雑誌である。

『演芸講談界』はもともと、大正6年創刊の『活動と講談』が始まりであり、それが大正7年3月には『演芸講談界』と誌名を変更したのであった。

霜田史光は、『活動と講談』『演芸講談界』の時代から発行元と深いかかわりを持ち、それが『小説倶楽部』（大正10年1月創刊）にまで続いたのである。

『小説倶楽部』はその「創刊の辞」に、「本誌は（中略）高級文芸、殊に小説の民衆化と云う目的を、最も鮮明に提唱するものであります」とあるように、大正時代中期の「民衆芸術論」の影響を強く受けていると見られる。

『小説倶楽部』の全貌については未だ不明な点もあるが、曾根氏の論考「雑誌『小説倶楽部』と小林多喜二」（EDI発行『舳板』第Ⅲ期第13号 2007年3月）によれば、『小説倶楽部』は大正11年8月号で終刊したと判断することができる。創刊から終刊までの間に小説は、懸賞小説などの投稿作品を始めとして多く掲載されたが、詩（新民謡を含む）の掲載は少ない。詩の中心は野口雨情と霜田史光である。彼らの作品と、投稿された詩・新民謡が掲載されている。それはこの雑誌が、大正中期から盛んになった「民衆芸術論」の影響を受け、さらに大正期労働者文学への「架け橋」のような位置を占めていたからであると考えることができる。

霜田史光が『小説倶楽部』に発表した作品（民謡がほとんど）は、次のとおりである。

大正10年（1921年）

2月 「白紙の恋文」

3月 「出船のあと」

4月 「贈りもの」

5月 「丘の上から」

6月 「渡り鳥」

「荒野の恋」（＊翻訳小説、原作・シャトーブリアン）

7月 「秋風」

8月 「よしきり」

9月 「洪水」

11月 「浜のわかれ」

12月 「山の思ひ出」

## （17） 田園画家森田恒友と霜田史光

森田恒友と霜田史光との関わり合いについては既に、拙著『評伝 霜田

竹 長 吉 正

史光』（日本図書センター 2003年9月）「第10章 郷里浦和に育まれた詩人的資質」で述べたことがあるので、詳しくはそれを参照していただきたい。

ここで紹介したいのは、森田恒友の文業である。森田は周知のように三冊の随筆集を刊行している。すなわち、『平野随筆』（古今書院 昭和9年3月）『恒友画談』（古今書院 昭和9年5月）『画生活より』（古今書院 昭和9年7月）の三冊である。これらの中に収録されていない森田の随筆がある。わたくしはそれを古書店で入手した。発表済みのものとしたら、何という雑誌（もしくは新聞）に発表されたものか知りと思う。もしご存知の方がいたら、ご一報願いたい。

以下に、その随筆一篇を掲げる。

### 銀鳩と雀等

森田恒友

三四年前から飼っている銀鳩が、久しぶりに暮れ近くなって、かわいい二つの雛をかえた。鳩は一年に数回卵を産み、うまくいけばそれが一度に二羽のかわいらしい雛を見得るのだが、どういうものか、去年一年は卵を産むには産んでも、いつも、一向<sup>いっこう</sup>うまくかえらずに過ぎてきたが、ようよう霜が降りて寒くなってから彼等<sup>かれら</sup>の産んだ卵が久しぶりに完全にものになった。何やらもうけものをした感じもあり、家族らにとってのかわいらしい子どもが家庭に二つ増した喜びもあり、とにかく、めでたいお正月を迎えることになった。

二つの家<sup>ことほ</sup>を寿いで「一名、鳩の卵と読む」などと落語家が言うように、鳩というものは、ふしぎに二つと定<sup>き</sup>まっているようだ。一つを産み、実に一日ぐらいを置いて一つを産む。それから、かわるがわるに彼等はそれを巣にかかえる。やがて二十日くらいもした頃、いつの間にか親鳥の腹の下からピイピイという声が聞こえる。つい、その親鳥の羽を少し押しのけて、ピイピイのすがたを見ようとする。見れば、やっぱり、いつものように、

まだ眼の開かぬ<sup>はだかご</sup>裸子が、パイパイと首を振っているのだ。いっこう、海の物とも山の物ともつかぬような彼等、裸子のすがたは、頭つきから顔つきは何か爺さんのようでもあり、虫けらのようでもあり、純白な美しい親鳥から、どうして、こんな不思議なものが生まれるものかとさえ思われる姿だが、やがて半月も経った頃、だんだんに彼等に蓑毛が生えて、ぶよぶよとした純毛に包まれてくると、彼等は初めてかわいらしい本当の鳩の子どもになる。

どことなし、ぶよぶよとした、純白な銀鳩の子が、ほちんと止まり木にふくれているすがたは、どうもかわいらしいものだ。あまり鳥などの好きそうもない親類の客などが、たまさか、そういう姿を見ると、「まあ、かわいらしい」と言ってくれる。やっぱり、無邪気な者の様子は、誰にもかかわいらしく感ぜられるものと見える。

私はこの鳩等を描こうとして、幾度、彼等の籠のそばへ鉛筆と紙とを持ってうずくまったか知れぬ。特に彼ら子鳩らが、ちょうどかわいい盛りになって、止まり木にぼつねんと二つ並んでいる姿のかわいらしさを見ると、私はどうも油絵具を持ち出す気にならず、何とかしてこれを毛筆<sup>のぼ</sup>に上せようという気になり、ときどき写してみるのだが、どうも思うようにいかぬ。何枚もの<sup>はご</sup>反古紙を作っては中止してしまう。彼等の形は実はたやすく写せるのだが、どうも鳥の感じというものは、それぞれに難しいもので、私のように飽きるほど彼等を見てからでないと筆をとる気にならぬものは、いろいろな小鳥など、なかなか写せないが、かわいい鳩はいつか、私の<sup>えふで</sup>画筆を恵ませるだろうか。

近年だんだん、私も花鳥画に興味をもち、ときどき、古人の花鳥画譜などを開いてみると、なかなか古人にはよいものがあり、その花鳥愛撫の画境などに、ずいぶん私は親しい感をもつ。

庭に餌をあさりに来る雀などを、冬の朝日を受ける窓に寄って、私は閑々<sup>かんかん</sup>たる気持ちで彼等を眺めることがよくあるが、どうも面白いものだ。あれらの様子は可憐<sup>かれん</sup>でもあり、なかなかすばしこくもあり、また、羽を立てて

飛び立つ様子はなかなか颯爽<sup>さつそう</sup>たる感じもあって、そういう種々相を本当に描き現すのは、ずいぶんよく彼等を見て、親しんでからでないと、紙上に現<sup>げん</sup>じ出すことはできないものだと感じる。

庭隅<sup>さるすべり</sup>の百日紅の枝端に、よく、雀らがちち、ちちと枝から枝に飛び交<sup>か</sup>うのを見るが、そういう際の彼等の様子はいかにも可憐に楽しそうだ。だが、彼等は時に、窓前の日南に出してある鳩籠の中へ、鳩らのお人好し(でない、お鳥好し)を馬鹿にして、籠の中の鳩の餌を公然と盗みに来る、その彼等のずるような様子は、お話にならぬ。彼はまず、最初のうち、一二間離<sup>けん</sup>れた地上に餌をあさる真似をして、それとなしに鳩の様子をうかがっているようだが、鳩の間拔けたおとなしさが、「あいつの餌を盗んでも大丈夫だな」と感ずるものと見えて、いつの間にか、こっそりと籠の中の餌壺に口を突っ込んで、知らん顔をして、餌を盗み食っている。時に鳩の奴が盗人ありと感づいて、やおら身を起して彼等を追う時には、「おおきに、お邪魔さま」と言わんばかりに、パーと飛び逃げてしまうが、一時<sup>いつとき</sup>すると、また、いつの間にか鳩の家には盗みが入っているのだ。

その様子の間抜けさと機敏さとの対照がおかしくもあり、かわいくもあり、冬の日南の窓前に、こういう様子を見ていると、いつの間にか半日を費やしてしまう。いやはや、まことに閑々たる暖日ではある。

#### [注記]

- (1) 四百字詰め原稿用紙全5枚。
- (2) 発表の雑誌・新聞、及び、収録の単行本は不明。
- (3) 原文は旧漢字旧仮名遣いだが、ここでは新漢字新仮名遣いに改めた。

#### [作品の鑑賞]

鳩や雀の観察が、実に行きとどいている。さすが、画家の眼である。鳥の動きをよく見ているのみならず、それらの鳥に、いつの間にか感情が入り、まるで人間のしぐさを見るような心持になっている。鳥の姿を写すに



しても、このような心持にまで至らないと、本質は捉えられないのかと思う。「そういう種々相を本当に描き現すのは、ずいぶんよく彼等を見て、親しんでからでないと、紙上に現<sup>げん</sup>じ出すことはできないものだと感じる。」という筆者の言葉は、実に重味がある。

「彼等の形は実はたやすく写せるのだが、どうも鳥の感じというものは、それぞれに難しいもので、私のように飽きるほど彼等を見てからでないと筆をとる気にならぬものは、いろいろな小鳥など、なかなか写せないが、かわいい鳩はいつか、私の画<sup>え</sup>筆<sup>ひで</sup>を恵ませるだろうか。」対象の物を「飽きるほど」見てから筆をとるというのは、もうその時は対象物を見なくても、その姿形がすっかり脳裏に焼き付いているということであろう。しかし、それでも、納得のいく絵はできない。あとは、対象物と画家とが一心同体となるような境地が訪れるのを待つしかない。それは、まさに「神韻縹緲たる」境地の現前する瞬間であろう。

わたくしはこの森田恒友の文章を読んで、すぐれた詩やすぐれた文が産み出される瞬間も、このようなものなのだろうと思った。したがって、この文章は、ある冬の日の銀鳩と雀らの姿を素描しているにとどまらず、森田自身がそれこそ天啓のようにして対象物の本質をとらえる刹那の瞬間を描いていると、わたくしは理解した。

ところで、この章の冒頭で『評伝 霜田史光』を参照していただきたいと書いたのだが、もはやこの本は絶版となっていて入手が困難であると知人から聞かされた。そこで前言を撤回して著書から、森田と史光に関係する部分のみを抄出して、以下に掲げる。

霜田史光は関東平野の一角、浦和に生まれた。同じ関東平野に生まれた森田恒友は「平野人」（平野に生まれた人）の感慨を次のように記している。

しこたんたん  
四顧坦々たる平野の草の上に生い立ったものにとっては、其<sup>その</sup>坦々

たる無驚異の自然の、在るがままを在るがままに受け入れることに、何やら唯<sup>ただ</sup>涙ぐましいものに襲<sup>おそ</sup>われる。朝は青田の上に太陽が昇り、夕は粟<sup>あわ</sup>の穂先に月の入るのを見ながら、其生を送る平野人の心は、唯暢<sup>のんき</sup>気では無いのだ。驚異の無い静かな自然の中には、山海の自然の中に生<sup>すこ</sup>を過すものの知り得ない哀愁があるのだ。平野人の踏む青草と黒土との中には、恐<sup>おそ</sup>らく海客山人の知り得ない哀愁がひそむのだ<sup>〔注1〕</sup>。

また、史光の随筆「蓮華草の中に」を見てみよう。そこには次のように記されている。

私はもうながい時、蓮華草の中に身を埋めている。四月のある日の午前、此<sup>こ</sup>処は荒川沿いの堤の横腹である。顔の上のハンカチ<sup>すか</sup>を透して太陽の微笑<sup>ほほえ</sup>むような輝きが、閉じた眼蓋<sup>まぶた</sup>を明るくする。体のすべては春の日の温<sup>ぬくも</sup>りに溶解するかと思われる暖かさ、心の奥底に隠れていた微<sup>かす</sup>かな感情さえも皆のびのびと外にと現われ出て、この楽しい春の恍惚に遊ぶかのである。風もないのにふわふわと流れてくる花の匂い、青草の匂い、……………それらは私の魂をやさしい眠りにつかせようとして、私はまた覺<sup>さ</sup>めてそれらを快く受けたいと思う<sup>〔注2〕</sup>。

四月の温かい太陽の光を受けて川沿いの堤で身と心を休ませている史光の姿が眼に浮かぶ。

関東平野に育ち自ら「平野人」をもって称する森田恒友は、画題として見る「川堤」は「平凡」「単調」であるが、「川堤」は画題以外の大きな意義があるのだと述べている。

森田はまず、次のように述べている。

画欲のためにカンバスを携えて行けば失望するのが当然のようにも思える。私は私の生れた村の付近から、蜿蜒<sup>えんえん</sup>として数十里、T川が太

平洋に入るまで、野の間を続く草<sup>くさ</sup>土<sup>ど</sup>堤<sup>て</sup>にむずかしい要求などをせずに、東京住いの今の自分の体を、時々寝ころがして貰<sup>もら</sup>うだけでも、画債の催促に押し詰った心を休めることが出来るのだ。だから私のような宿命的の平野人と、制作本位に心が一杯になっている人とは、あんな川堤を見る眼が違うのは当然であるのだ。画欲本位で見る川堤は、何<sup>ど</sup>処<sup>こ</sup>へ行っても、多く平凡な単調なものに相違ない<sup>《注3》</sup>。

森田はまた、次のように述べている。

どっちにしても黙って一二時間過ごせる人と対<sup>たい</sup>酌<sup>しやく</sup>し、黙って日の照<sup>て</sup>って居る土<sup>ど</sup>堤<sup>て</sup>を半日相手にし、音を立てずに悠々流れる川水を見たりすることは、疲れた心を休めるためにも、私の時に必要とすることでもある<sup>《注4》</sup>。

このように画家森田恒友は、慰藉として「川堤」の意義に言及している。史光とて同じ思いだっただろう。

ところで、「川堤」を愛好した芸術家に与謝蕪村がいる。蕪村について森田は次のように述べている。

蕪村という人も川堤を好んだ人か、「春風馬堤曲」というものは少年時の私を深く動かしたものだ。今も私は春の堤を歩きながら、折々「春風や堤長くして家遠し」などと一人口ずさむこともある。あれは自分のような土臭いものの心には、華<sup>はな</sup>やか過ぎる詩ではあるが、やはり蕪村のような才華に優れた詩人でなければ、あれだけの川堤の詩は出来そうもない<sup>《注5》</sup>。

史光は成人してからも実家のある浦和によく帰った。そして、荒川沿いの堤をよく散歩した。堤の横腹は、まさに母の懷<sup>ふところ</sup>のような感じを彼に与え

た。そこに寝転んでいるとまるで母の懷に抱かれているような温かさが伝わってきた。殊に春先の南側の堤は温かく、草の上にじっと寝転んでいると、知らぬ間に眠ってしまうのだった。

古来、人はその生れた風土、環境によって精神が形成されるという。霜田史光は浦和の実家の傍の荒川、及び、その川堤によって心が育てられたと言い得る。

### [注]

- 《1》 森田恒友『平野雑筆』（古今書院、昭和九年三月）所収「続平野雑筆」。  
引用は同書11ページ。但し、仮名遣い等は現代表記に改めた。
- 《2》 霜田史光「蓮華草の中に」（『蒼空』第二巻第五号、大正八年五月）。  
但し、仮名遣い等は現代表記に改めた。
- 《3》 前出《1》『平野雑筆』所収「川堤の話」。引用は同書211～212ページ。  
但し、仮名遣い等は現代表記に改めた。
- 《4》 前出《1》『平野雑筆』所収「川堤の話」。引用は同書212～213ページ。
- 《5》 前出《1》『平野雑筆』所収「川堤の話」。引用は同書215ページ。

## (18) 終りに——再び述べる、霜田史光の文学史的位罫——

霜田史光の文学史的位罫については既に何回か数えきれないくらいに述べてきたので、ここではごく簡潔に述べておく。

霜田史光について今は知らないという人が少なくなった。それは情報社会のおかげである。しかし、わたくしが史光について研究を始めた頃は、そうではなかった。なにしろ36歳9ヵ月という若さで亡くなったから、生前の彼を記憶している人が少ない。それに著書も少ないから文学事典などにも碌なことが書かれていない。だが、文学雑誌を始め新聞や単行本などを調べていくうちに、この文学者が非常に精力的な活動をしていたのだということがわかってきた。そして、なにしろ幸運だったことは、史光の親

類縁者に会うことができたことである。文学者についての研究は、書き残された文献のみならず、その人についての研究でもあるのだから、知人友人からの聞き書きが大切である。しかし、そうはいっても人の記憶には誤りや誇張があるから注意を要する。そうなると、やはり、書き残された文献の発掘ということが大事になり、また、その文献をどう価値づけるか、どう読み込むかという研究者の「資料を読み込む力」が重要になってくる。

研究のイロハはそれくらいにして、さっそく本題に入ると、霜田史光は宮澤賢治とほぼ同じ時代を生きた人だということである。賢治は東北の花巻から中央の東京を目標して上京したが、史光はそれに比べるとはるかに近い所に住んでいたので東京に出ることは難儀でも何でもなかった。埼玉の浦和にいて、少年の頃から文を書いたり詩のようなものを作ったりするのが好きだった。一つ上の兄静志（本名、利平）は勉強がよくできた上に、絵を描くのが好きだった。家は兄弟姉妹がたくさんいる農家だった。そんな中から末の兄弟（静志と史光）が東京へ出て、羽ばたいた。

兄は画家を目指したが、途中から美術教師となり、さらに、心理学を学び、美術教育と心理学の研究者になった。イギリスの自由学校で有名なA・S・ニールの翻訳で知られている。

弟の史光は、工科学校で建築を学んだが、どうしても文学がやりたくて、電話局や銀行で働きながら、その合間に詩を書いた。当時の詩壇は白露時代とも言われ、北原白秋と三木露風が星のように輝いていた。史光は三木露風に近づき、詩誌『未来』の同人になった。露風門下の四天王のようにして、華々しくデビューした。しかし、師匠はいつまでも弟子の面倒を見ているわけではない。露風はカトリックに入信し、宗教詩人として北海道のトラピスト修道院に籠ったりする。そして、詩壇は白露時代から、次の若い世代へと移行していく。萩原朔太郎、室生犀星らの『感情』詩派、さらに、辻潤・萩原恭次郎らのダダイズム派、岡本潤・小野十三郎ら『赤と黒』のアンナキスト詩派らが続々と登場する一方、福田正夫・白鳥省吾・百田宗治ら『日本詩人』に集まる民衆詩派がある。このような群雄割拠という

か、立場や考えの違う詩誌が乱立する中、霜田史光も詩壇の海を漂流した。

彼は初め、西條八十・柳沢健らと『詩王』という詩誌を刊行していたが、初めての詩集『流れの秋』を出版してからは、白鳥省吾・福田正夫らの民衆詩派に近づく。つまり、芸術至上主義とでもいうべく、詩の純粹性重視の立場から、「民衆のための詩」という、いわゆる詩の大衆化運動に変化していく。そして、その究極が、「新民謡の創作と普及」という活動である。それは大正中期から盛んになった「民衆芸術論」の影響を受けたものと思われる。

今それを彼の関わった主要雑誌の変遷で示すと、次のようになる。

『未来』（大正4年～6年）→『詩王』（大正8年～9年）→『小説倶楽部』（大正10年）→『日本詩人』（大正11年～12年）→『民謡詩人』（昭和2年～3年）

『未来』『詩王』の時期は芸術至上主義の純粹詩の時代、『小説倶楽部』以降は新民謡の時代である。『日本詩人』の時期は過渡期であり、純粹詩のようなものも一部、作っている。そして、全体的に見ると、史光の詩風は徐々に平明になり、文語調から口語調になる。初期は難解な象徴詩のようなものもあり、これは露風の影響を強く受けたからである。露風の象徴詩は、よく言われるように、本場フランスの象徴詩と異なり、日本風のものである。西行の和歌や、松尾芭蕉の俳諧のような詩的象徴性であると研究者諸家から評されている。しかし、それはともかく、史光はこの時期、つまり、芸術至上主義の純粹詩の時代において、なかなか佳い詩を作っている。その一部は、唯一の詩集『流れの秋』に収められている。しかし、その数は少ない。あともうちょっと、彼の芸術至上主義の純粹詩を読みたい。そう思う読者もいるのではなかろうか。

霜田史光は、本業は詩人であるが、他に童話、戯曲、随筆などたくさんの散文を残している。いずれも個性的で味わい深いが、特に講談本などが

ら材を得た童話に面白いものがある。

いずれにしても霜田史光という文学者は未完成だったので、未完成なるが故の魅力が存すると言うことができる。

## （19） 霜田史光著作目録、霜田史光研究参考文献目録の補遺

以下は、わたくしの著書二冊（『評伝 霜田史光』『霜田史光——作品と研究』）所収の「霜田史光年譜」「霜田史光作品年譜」「霜田史光参考文献一覧」の補遺として記す。

### 〔霜田史光年譜及び著作目録の補遺〕

大正12年2月

詩「権現様の鳩」『蟻の塔』第2号

＊歌うためにつくられた詩。草川信の楽譜が付いている。

大正13年4月

エッセイ「詩とその作曲に就て（上）」『音楽新潮』 ＊（下）は未確認

大正13年9月

詩「夜の虫」『真砂』第2年9号

大正13年12月

詩「恋の幽霊」『真砂』第2年12号

大正14年4月

戯曲「未来の女（＊続き）」『真砂』第3年4号

大正14年7月

日本民謡協会が設立。機関誌『日本民謡』を霜田史光が編輯。発行所は東京市下谷区御徒町3-67 日本民謡協会。但し、9月から10月にかけて民謡運動の進め方で意見が分かれ、脱会する者多し。

大正14年10月

英 美子（はなぶさ 渋谷栄一の夫人）の第1詩集『白橋の上に』（発行・真砂社

竹 長 吉 正

出版部)の出版記念会が銀座のキタニホン楼上であり、出席。

大正15年2月

詩「どよめき」『真砂』第4年2号

大正15年6月

白鳥省吾が大地舎を起し、詩誌『地上樂園』を創刊。農民の生活と結びつき、地方文化の向上を目ざす。史光も協力する。

大正15年8月

「霜田史光氏、ここ二三年詩壇からも隠れて大衆物に手を染めたり、二三の劇団に関係したりして、多忙繁雑を極めたが、左記に静かな生活を九月一杯なし、第二段の活躍を試みる準備をなす由。(※左記住所は)神奈川県三浦郡三崎町二町谷白石 小川いち方」『真砂』第4年9号の〈消息〉欄より

#### [アンソロジー等収録作品]

『評釈 大正詩読本第二巻』中西悟堂編著 紅玉堂書店 大正15年8月

「雪降る夜半」※初出は『日本詩人』大正11年5月号

『古今民謡選』松村又一編 泰文館書店 昭和4年4月

「酒の唄」初出不明

「初夏三崎風景」初出不明

#### [研究参考文献]

伊藤信吉「白鳥省吾の世界(上)(中)(下)」岩波書店『文学』1985年1月号、1985年6月号、1986年6月号

安 智史「論争する民衆詩派——白鳥省吾VS北原白秋 その周辺——」

日本近代文学会『日本近代文学』第67集 2002年10月

筒井清忠『西條八十』中央公論社※中公叢書 2005年3月

筒井清忠「西條八十の歌謡観——「うた」の岐路としての現代」学燈社『国文学』2006年8月号



## （20） 附記及び総目次

【附記】 拙稿「霜田史光研究落穂拾い（その２）」（『白鷗大学論集』第30巻第1号 2015年9月）の中での誤記を訂正する。その論考の第（10）章「童話「額を打たれた西行法師」の典拠と人物名の訂正」で、西行の供をした法師の名を「西往」としたが、その後の調査で「西住」が正しいと判明した。『仏教史談』中の表記「西往」が誤植であることが明らかになったからである。よって、西行の供をした法師の名は従来どおり、「西住」（さいじゅう。旧仮名表記は、さいぢゅう）である。

【総目次】 拙稿「霜田史光研究落穂拾い」（『白鷗大学論集』連載）の総目次を、次に掲げる。

（その１）……第29巻第1～2合併号（2015年3月）

はじめに

- （１） ペンネーム史光の読み方
- （２） エリザベス・アブタン
- （３） 日本工科学学校
- （４） 史光の妻寿恵
- （５） 史光の少女小説「詩人の妹」
- （６） 一少女の眼に映った史光
- （７） 石井桃子と校友会雑誌

（その２）……第30巻第1号（2015年9月）

- （８） 戯曲「血みどろ月」とその周辺
- （９） 史光の戯曲作品リスト及び雑誌『真砂』<sup>まさご</sup>掲載作品リスト
- （10） 童話「額を打たれた西行法師」の典拠と人物名の訂正

竹 長 吉 正

(その3)……第30巻第2号 (2016年3月)

- (11) 藤澤衛彦と大正期民謡祭
- (12) 井上康文の霜田史光論
- (13) 福田正夫における「民衆詩派らしい特徴」
- (14) 女学生における「理想の人間」と九条武子

(その4)……第31巻第1号 (2016年9月)

- (15) 大正期・昭和初期の文壇資料と霜田史光  
——『中央文学』『文章倶楽部』——
- (16) 雑誌『小説倶楽部』と霜田史光
- (17) 田園画家森田恒友と霜田史光
- (18) 終りに  
——再び述べる、霜田史光の文学史的位置——
- (19) 霜田史光著作目録、霜田史光研究参考文献目録の補遺
- (20) 附記及び総目次

(本学教育学部教授)